研　究　業　績

へき地集落における過疎化要因

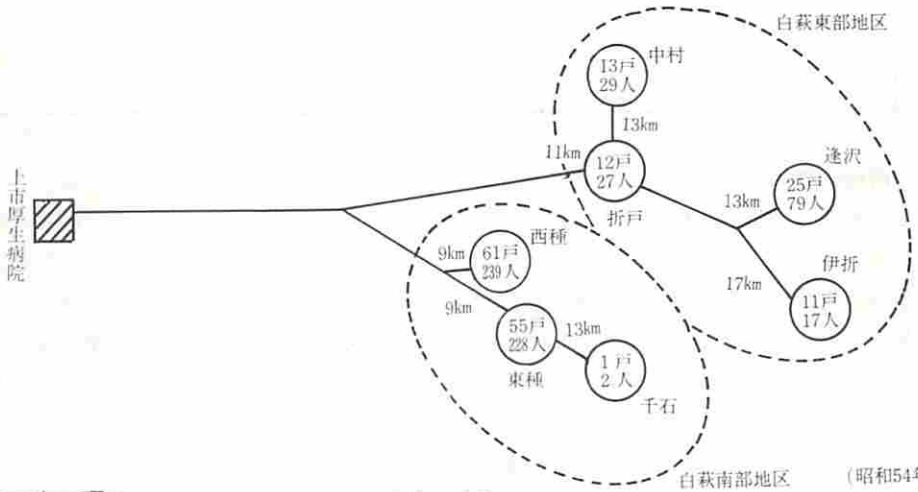
上市厚生病院　越　山　健　二
市　村　　潤
神　谷　貞　子

I　は　じ　め　に

高度経済成長の中で急速な人口の移動から過疎化現象を生じ，それが国の重要な課題となり幾多の施策も行われている。上市町においてもそれは例外ではない。連帯や協力の中で維持された従来からの農林業が存続困難となり，消失した集落もいくつかある。

ここで調査，検討した集落は，合併以前は白萩村に属した２つの集落で，白萩東部と白萩南部と称され，共に過疎化の傾向にある。

白萩東部は過疎率が高く，白萩南部はその傾向が緩慢である。私共はこの点に着目し，その要因について調査，検討を加えてみたので報告する。



（昭和54年）

II　調　査　事　項

〈1〉　人口の推移

〈表１〉

昭和	38年	40年	50年	54年
白萩東部	855人	816人	221人	152人
白萩南部	1,038	948	561	468

表１は人口の推移を示す。白萩東部は昭和38年から昭和54年まで僅か18年間に17.8%に減少し，その反面白萩南部は45.2%で過疎率は低く，両地区共に昭和40年から昭和50年に著明な人口の移動が進んでいる事を示している。

白萩東部は現在なお人口の流出が止まらないが白萩南部は近年若者のＵターンもあるという。白萩東部小学校は一時は在校生 200人を要したが現在８名で廃校が予想される現況にある。町からの距離は東部11km，南部９kmで東部はやや遠隔地にあり，一つの峠を越えなければならない。更に東部はやや高地にあり積雪も多い。しかし両者共に以前は農林業，製炭業等生産と消費は同一の条件と考えられる。

昭和38年以降は両地区とも道路は改良され，

学校は改築され，水道が整備され，その他の生活環境は町部と比較して大差はないと思われるくらいに整備されている。しかし白萩東部は昭和44年８月の降雨多量による災害で耕作用水等に多大の被害を受けている。

〈２〉　耕地面積及び山林面積

白萩東部と白萩南部に代表される逢沢集落と，東種集落についての耕地面積及び山林面積を第２表及び第３表に示した。第２表は約200年前の両集落の比較であり，第３表は今日のものである。２表に示す如く東種は耕地面積，山林所得共に格段に多く，耕地は約８倍，山林は約５倍であるが，今日でもなお東種は逢沢に比べて田，畑，山林，人工林共に２倍ないし６倍に及び，第一次産業による人口の収容力は高い事がうかがえる。

〈表２〉

	耕地面積	山林所得
東　　種	４４５　石	２３０　匁
逢　　沢	５５　石	４３　匁

1600年　上市町史より

〈表３〉　耕地面積及び山林面積

農業国勢調査より

	東　種		逢　沢		上市全体	
	44	54	44	54	44	54
農家数	58戸	44戸	41戸	16戸	2,333戸	2,021戸
田	2,790(48.1)	1,792(40.7)	1,509(368)	635(39)	207,694(89)	189,995(94)
畑	224(3.9)	121(2.8)	37(0.9)	54(3.4)	1,354(0.6)	6,132(3.0)
山林	24,644(425)	22,987(522)	4,018(98)	1,127(70)	155,987(67)	129,508(64)
うち人工林	13,573(234)	14,160(322)	2,582(63)	888(56)	53,158(23)	59,274(29)

(　)内は一戸当り　単位：a

〈３〉　所得の推移

更に両集落の所得の推移をみると表４の如くである。

両集落の人口，世帯は従来より逢沢集落が東種集落の約半数の構成であったが，昭和54年現在では半分以下に減少しており，一世帯当りの所得は東種にやや多いにかかわらず，一人当りの所得は逢沢集落に高額となっている。これは，東種において世帯に扶養者が多い事によるものと思われる。

更に第５表は一人当りの農業所得と給与所得及びその依存度を示したものであり，昭和44年当時東種においては農業所得が逢沢より高く，一人当りの給与所得は逢沢より低いが10年後の昭和54年には農業所得は両者共に低下し，その依存度は東種3.2%，逢沢2.8%で上市全体の2.3%に近くなり，農業所得の急激な衰退がみられる。

一方給与所得の依存度は昭和44年には東種28.1%，逢沢34.4%であり，昭和54年は東種90.1%，逢沢92.3%で共に逢沢より高く，上市全体の83.5%より高い事は注目に値する。

第６表は所得の伸び率を示すが東種において，その倍率がやや高値を示している。

〈表４〉

	東　種		逢　沢	
	44　年	54　年	44　年	54　年
人口	328人	215人	170人	78人
世帯	72戸	51戸	42戸	25戸
納税義務者	103人	63人	67人	28人
農業所得	8,439,948	2,566,160	4,017,601	944,550
営業所得	3,088,460	2,664,403	1,337,000	1,078,400
給与所得	9,612,979	66,610,348	8,532,525	30,744,211
その他	13,067,800	2,058,000	10,949,042	537,098
計	34,209,187	73,898,911	24,836,168	33,304,259
納税義務者一人当り所得	332,128	1,172,999	370,689	1,189,438
一世帯当りの所得	475,128	1,448,998	591,337	1,332,170
一人当りの所得	104,296	343,716	146,095	426,978

〈表5〉 農業所得及び給与所得

年	東種 44	東種 54	蓬沢 44	蓬沢 54	上市全体 44	上市全体 54
一人当りの農業所得	25,732	11,936	23,633	10,110	32,708	14,608
農業所得の依存度	24.7	3.9	16.2	2.8	16.2	2.3
一人当りの給与所得	29,308	309,816	50,191	394,157	115,042	521,991
給与所得の依存度	28.1	90.1	34.4	92.3	57.0	83.5

（依存度は%）

〈表6〉 所得の伸び率

	東種	蓬沢	上市全体
納税義務者一人当り所得	3.27 倍	3.21 倍	3.34 倍
一世帯当りの所得	3.05	2.25	3.04
一人当りの所得	3.29	2.92	3.10

（昭和44年～54年，10年間の所得の伸び率）

〈4〉 住民の意識

両地区共に集落の開村は古く，宗教心に厚い。祭りや神仏に対する年中行事は長い伝統の中で独特の文化として維持され，運命共同体の地域が形成されてきた。白萩東部では生活基盤である農林業が昭和27年及び昭和44年の災害により多大の被害を受け，山間寒冷の農林業の生産性の低さ，農林業の低落化と相まって集落の将来に希望を失い離村がはじまった。そしてそれが次第に雪崩の様に過疎の速度を早める結果となった。一方白萩南部で特筆すべきは昭和24年の壮年会の結成である。その重点目標は「健康で豊かな村づくり」で(イ)青少年健全育成，(ロ)住民の文化向上，(ハ)農林業の生産向上，(ニ)婦人の地位向上，(ホ)生活改善，(ヘ)慰安会や各講演会の開催である。この壮年会が母体となり，青年団，婦人会が協力し，昭和31年に公民館落成と共に壮年会はより活発な公民館活動に移管されて今日に及んでいる。住民の集落を守る共通の意識は東部よりはるかに高いものと思われる。

Ⅲ 考　　察

昭和44年の豪災害により，生産基盤を荒廃させ，人口の流出がはじまり，それが雪崩現象となり再生困難な白萩東部と今日なお再生力が残されている白萩南部の両地区について過疎化の要因を考えてみると，東部はやや町の中心から遠隔地にあり，地形，地質条件も古くから劣り耕地面積が少なく，山林の所得も少ない事があげられる。この事は従来農林業を主体としてた家計経済に大きな影響を及ぼした事が先ず考えられる。更に積雪，災害等の条件は同一であると思われるが，通学，通勤等については道路，学校等の整備にもかかわらず，東部は一つの峠を越えなければならないという悪条件にある。又白萩南部においては戦後直ちに集落を守るために壮年会が組織され，婦人会活動や青年団，公民館活動等が活発に行われ，今日もなお連綿として持続され，村を守る住民意識にささえられている事は注目に値するものと思われる。この事は所得の上昇を生み，協力と連帯の地域性が保持され，古里意識の向上となり，若者の，Uターンに希望をもつ事を可能にしたものと思われる。

Ⅳ 結　　論

過疎化の進む中で過疎率の高い白萩東部と過疎率の低い白萩南部について比較し，過疎化の要因を検討してみた。両地区共，道路，交通，教育など整備され降雪，災害等同一条件にあると思われるが，東部地区は地形・地質等低劣で，古くから農林業の生産性の低さに加え，昭和44年の降雪災害で農業維持存続に希望を失い，更に農林業そのものの低落化により家庭経済に，より早く影響を及ぼしたものと思われる。一方，南部地区はその影響がややおそく，早くから住民の村を守る意識が強く住民の組織活動により，協力や連帯が維持され過疎化を防止し，村の再生に希望を託しているものと思われる。